

主節における非文末ノダ文の機能と構造

井島 正博

はじめに

ノダ文の研究は、一九五〇年代に緒についた比較的新しい研究分野ではあるものの、すでに研究文献は二〇〇本を越えている。しかるに、ほとんどのものは文末ノダ文に関するものであり、文末ではない、ノデハナイ（否定文）、ノカ（疑問文・疑問補文）、ノダロウ・ノカモシレナイ・ノニチガイナイ（推量文）、ノナラ（順接仮定条件節）、ノダカラ（順接確定条件節）、ノダガ（逆接確定条件節）、ノデハナク（否定一般条件節）などに関する研究は、すべて合わせても三十本程度、すなわち二割にも満たない。

それはそれで理由のないことではない。ノダのように、一次的な意味が非常に希薄な表現が、文末という、何らかのモダリティを担わざるをえなく、また語用論的な派生を惹起しやすい位置に用いられると、多岐に亘るさまざまな

二次的な用法が見出されることになり、どうしてそのように多くの用法が見出されるのか、関心を引きやすいということなのだろう。

しかるに、これまでの研究では、文末ノダ文とそれ以外のノダ文との間にある共通性を取り出すことには、必ずしも成功していなかったように見受けられる。それに対して、井島（二〇一〇・三a）では、先行研究を帰納的に比較検討した結果、ノダ文の諸用法に共通する一次的な意味を求めることができることを主張した。さらに、井島（二〇一〇・一二、講演）では、文末ノダ文に限って、その一次的な意味に対してさまざまな条件を課することによって、文末ノダ文の諸用法を演繹することができるとを示した。本稿では、文末ノダ文ではない用法に関しても、同様の演繹が可能であることを論じたい。

1 ノデハナイ否定文

ノデハナイ否定文に関しては、これまでスコープ説によって説明されてきた。久野（一九八三・四）は、むしろ否定文を分析することを目的としたものであったが、その中にノダ文の働きを組み込んでいる。すなわちまず、(1) aの意味はそもそも写真そのものを撮らなかつたことを表わしている、すなわち否定の「焦点」は述語ということになり、否定辞ナイの機能は直前の述語を打ち消すことであるという。しかしこの文を(1) bのように、単に「写真」を「この写真」とすると、それだけであれば非文になってしまうが、(1) cのように、さらに文末を「のではない」にすると自然な文となる。ちなみに(1) cの意味は、写真を撮ったことを否定しているわけではなく、写真は撮ったのだが、その写真は「この写真」ではないと打ち消していることになる。すなわち否定の「焦点」は否定辞の直前の述語ではなく、「この写真」であることになるが、このことを説明するために、「スコープ」という概念が導入される。久野（一九八三・四）が明確にそのように述べているわけではないが、そこでノダの働きがどのように了解されているかを付度すれば、ノダ（特に形式名詞、あるいは準体助詞のノ）の機能は、それに上接する述語句をひとまとまりのものとして体言化する働きを担っており、そこに否定辞が下接すると、

体言化された述語句全体に否定の影響が及ぶことになり、それを欧米語の否定理論になぞらえて「スコープ」と呼ぶことができる。否定の焦点はそのスコープの中に含まれていればよく、したがって否定辞の直前の述語より上の要素が焦点となることも可能となるのである。

焦点

(1) a パリで写真を撮らなかつた。

b *パリでこの写真を撮らなかつた。

スコープ

焦点

c 「パリでこの写真を撮った」のではない。

確かにこのような議論はそれまで気付かれなかつた否定文の特徴を明らかにし、さらにそれに理論的な説明を与えたという意味で、画期的な業績であった。ただ、井島（一九九一・三、二〇一〇・三a）でも、このような久野（一九八三・四）で提示された否定理論にはいくつかの問題点があることを指摘した。何より、否定文中に用いられたノダはスコープを表わすものであると考え、文末に用いられたノダやそれ以外のノダの用法と断絶したものであることになってしまふ。実際、そのような議論を展開したのとして、野田（一九九七・一〇）がある。ここでは、主に否定文もしくは疑問文に用いられるのが「スコープのノダ」であり、主に文末否定文に用いられるのが「ムードの

ノダ”であつて、両者はまったく別物であると、明確に論じられている。

しかるに、否定文（もしくは疑問文）中に用いられたノダとそれ以外のノダをまったく別の機能を持つ表現であると考えるのは妥当なことなのだろうか。ちなみに、井島（一九九一・三）では、否定文に関して、久野（一九八三・四）を批判的に検討する中で、確かにノダ（というよりもノ）は、それ以上接する述語句を名詞化することによってひとまとまりのものとすることは認めつつ、それは一次的には、スコープのような抽象的なものを表わすのではなく、典型的には話し手の心内にあった（聞き手の期待）といった内容を表わすと考えるべきであると論じた。

すなわち、従来、文の自然さは文脈から切り離されて、その文単独で判断されることが多かったが、本来、文は何かの文脈に置かれているものである。たとえば、さきほどの(1)。(2)のような文脈において自然に用いられるが、この場合、相手（A）は「パリで写真を撮った」ということを事実として受け入れており（前提）、その当該の写真が「この写真」である、すなわち「パリでこの写真を撮った」と考えている（期待）。それに対して話し手（B）はその相手の期待を打ち消していると考ええるわけである。

(2) A: パリで撮った写真があるって言ってたけど、この写真
真はパリで撮ったんでしょ？

B: パリでこの写真を撮ったんじゃないよ。

そして、相手の期待「パリでこの写真を撮った」が打ち消されるとしても、その全体が打ち消されるわけではなく、あくまでその一部である（この場合「この写真」とすると、二次的には、相手の期待「パリでこの写真を撮った」をいわゆる否定の「スコープ」、まさに打ち消される部分「この写真」をいわゆる否定の「焦点」と考える、スコープ理論も成立することになる。

さてこのように、ノデハナイは多くの場合、〈聞き手の期待〉を打ち消すために用いられる。しかし、他にもたとえば(3)のように、〈発話時直前の話し手の期待〉を打ち消すために用いられる場合もある。

(一旦、パーティ会場から出て行った人物が、再び現れたのに対して)

(3) なんだ、帰ったんじゃないんだ。

これは、井島（二〇一〇・一二）において、文末ノダ文は、〈発話時の話し手の信念〉を表わすと論じた際、文末言い切り文に対して、あえて文末ノダ文を用いるのは、〈聞き手の期待・信念〉あるいは〈発話時直前の話し手の期待・信念〉との認識的ギャップがあることを示すためであると論じたことと通じるところがある。すなわち、文末という位置はそもそも〈発話時の話し手の信念〉を表わす位置であったが、そこにノダ否定文が用いられると、ノダ否定文

全体としては〈発話時の話し手の信念〉を表わすことになり、そこにノダを用いて埋め込まれた内容は、〈発話時の話し手の信念〉と対立するもの、すなわち空間的には〈聞き手の期待〉となり、時間的には〈発話時直前の話し手の期待〉となると考えられる。

ここで、〈何らかの人物の認識内容〉（あるいは〈聞き手の期待〉）という概念と、「前提(presupposition)―焦点(focus)」という概念との関わりについて若干考察したい。前提―焦点概念は、情報構造論が花盛りであった一九七〇年代のアメリカで盛んに議論の中に用いられた。しかるに、前提は、もともと記号論理学に用いられた哲学的な概念であった。すなわちその出自の尾を引いて、前提とは客観的世界において真である命題のことを指しており、「意味論的前提」とも呼ばれることがある。それが焦点と対にされるのは、言語学の情報構造の議論の中に導入され、「旧／既知情報(old/known information)―新情報(new information)」などと平行する概念として用いられるようになってからである。しかるに、日常言語の分析に有効な前提―焦点概念があるとするれば、それは対話の場で話し手も聞き手も事実であることを疑っていない（と話し手が認識している）命題内容が前提であり、断定文の場合、話し手は知っているが聞き手は知らない、あるいは疑問文の場合は逆に、聞き手は知っているが話し手は知らない（と話し手が認識している）

内容が焦点であるようなものであろう。すなわち、客観的世界において事実（真）であるかどうかなど、そもそも神ならぬ人間の身には知りようがないわけであるが、このようにとらえ直された前提のことは、「語用論的前提」と呼ばれることもあるが、このような前提―焦点には、〈何らかの人物の認識内容〉という概念がその根本にあることが了解される。

さてここで、井島（二〇一〇・三a）でも論じたことを繰り返すことになるが、井島（一九九一・三）では、否定文の根底には、肯定的な内容との対比が見出されると論じた。そしてその対比のあり方によって、否定文には四つの類型が見出された。

第一に、(4) b・cのような現実の他の事態との対比の上で用いられる、(4) aのような否定文が見出される。この類型は独立した事態同士を対比させるという意味で「事態間対比」と呼び、またそのような対比のありかたをもとに用いられた否定文を、事態が成立するかしないかを問題にしているという意味で「成否否定文」と呼ぶことにしたい。

(4) a パリでは写真を撮らなかった。

b 「ロンドンでは写真を撮った」

c 「ローマでは写真を撮った」

第二に、(5) bのような〈聞き手の期待〉との対比の上で用いられる、(5) aのような否定文が見出される。この場合、

確かに当該の事態は成立していないのではあるが、(5) c のような内容の特定されない〈前提〉が存在すると考えるべきかもしれない。この類型は、同一内容の聞き手の肯定的な期待を否定的な現実と対比させるという意味で「対期待対比」と呼び、またそのような対比のありかたをもとに用いられた否定文を、ある事態を描写するのにそのような表現があたっているのかどうかを問題にするという意味で「当否否定文」と呼ぶことにしたい。

(5) a パリで写真を撮ったのではない。

b 聞き手の期待「パリで写真を撮った」

c 〈前提「パリで何かをした」〉

第三に、(6) c のような〈前提〉のもと、その撮った写真は「この写真」であろうという(6) b のような〈聞き手の期待〉との対比の上で用いられる、(6) a のような否定文が見出される。ただし、次の第四の類型との違いとしては、この類型は「この写真」でないと述べたとしても、積極的にどの写真であるかを示唆したことはない。この否定の類型は、事態そのものが成立していることは疑いのない〈前提〉としつつも、それに関与する要素を他の要素と対比させて打ち消し、しかも積極的に他の要素があてはまることを示唆しないという意味で「要素独立対比」と呼び、またそのような対比のありかたをもとに用いられた否定文を、前提に対しあえて特定の要素でないことを示すという

意味で「補充（独立）否定文」と呼ぶことにしたい。

(6) a パリでこの写真を撮ったのではない。

b 聞き手の期待「パリでこの写真を撮った」

c 前提「パリで写真を撮った」

第四に、(7) c のような〈前提〉のもと、それは「花子と一緒に」だろうという(7) b のような〈聞き手の期待〉との対比の上で用いられる、(7) a のような否定文の類型が見出される。この類型は、「要素独立対比」が他の要素を示唆しないのと違い、むしろ積極的に(7) d のような含意を含むことになる。この否定の類型は、おおかたは要素独立対比と共通であるが、当該の要素が否定されることによって、他の要素があてはまることを積極的に示唆するという意味で「要素連動対比」と呼び、このような否定のありかたをもとに用いられた否定文を、同様の意味合いで「補充連動否定文」と呼ぶことにしたい。

(7) a 今日は花子と一緒に来なかった／来たのではない。

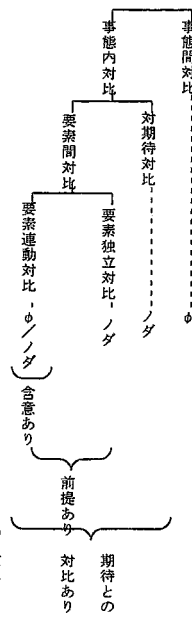
b 聞き手の期待「話し手は」今日は花子と一緒に来た」

c 前提「話し手は」今日来た」

d 含意「話し手は」今日は一人で来た」

ちなみにこれらの否定文の類型は以下のような階層構造をなすことになる(図表一)。ここで、本稿のテーマであるノダに注目すれば、ノダが用いられるのは、期待との対比のある当否否定文、補充（独立）否定文、補充連動否定文

である。そのうち、補充連動否定文はノダを用いても用いなくてもよいのは、否定される要素と、含意としての肯定される要素との間にも対比関係があり、そちらに重点が置かれれば聞き手の期待を表わすノダは用いられないためであると考えられた。



どうやら、ノデハナイ否定文に関しては、以上のような原則でおおかた説明できそうである。当否否定文は、何かはしたことを認めつつも、それを聞き手がこうなのであると予想するような内容（期待）を話し手が先んじて見当をつけて、それを打ち消すという構造となっている。(8) a・c・dのように、実際はどうであるのかをその前後に示している（多くノダを用いて）場合もある。特に、(8) c・dでは、意志「口をきく」でなく可能「口がきける」のではなかった、能動「生徒が騒ぐ」ではなく使役「生徒を騒がせる」というように、動詞部分の一部が打ち消されてい

る。そのような意味でも、いわゆる焦点は動詞そのものである場合だけでなく、事実／可能、能動／使役、肯定／否定など、述語のさまざまな次元を焦点とする可能性があることを了解しなければならない。

(8) a プラトンはソクラテスがボティダイアの陣営において一昼夜立ち続けて瞑想に耽つたということを記している。その時ソクラテスはまさに瞑想したのであつて、思索したのではない。 三木清『人生論ノート』141

b 死人の妹が一人、これは怪我をしているとは見えな
いが、放心したように口をあけたまま坐っていた。こ
の娘に「お気の毒です」と挨拶すると、「はい」と云う
だけで表情も変えなかった。泣いているのでもない。
不貞くされているのでもない。 井伏鱒二『黒い雨』299

c 「……さっき、おまえがはいってきた時、どうし
ておれが口をきかなかったか、おまえには不思議だつ
ただろう。しかし、おれは口をきかなかったのではない。
口がきけなかったのだ。おまえの顔を見たら、息
がとまりそうになったのだ。」 山本有三『路傍の石』592

d 「あれはな、生徒が演説をやっているんじゃない。教
師がやっているんだ。ビール箱の上に乗っかっている
のは生徒だが、あれはただの人形だよ。学校騒動って
いうと、世間では生徒が騒いでいるように思っている
けれども、ほんとうは生徒が騒いでいるのではない。」

生徒を騒がせているのだ。」 山本有三『路傍の石』 670

補充(獨立)否定文、補充連動否定文に關しては、獨立しているのか連動しているのか、突き詰めてもあまり生産的ではないだろう。要するに、何らかの前提のもとに、ある要素が当該の事態に關与していないことを述べるのが、両者を含めた広義の補充否定文である。

(9) a 泰平の時代にふさわしい、優美なきらめき烏帽子の下には、下ぶくれの顔がこちらを見ている。そのふつくりと肥った頬に、鮮かな赤みがさしているのは、何も臍脂をほかしたのではない。芥川龍之介「好色」 284

b 隠居さんは僕が戦局に詳しく通じていると思つて話をしに來たのではない。重大放送のことが氣になるので、ただ話相手を誰かほしかつたのだ。僕は当り障りのない話をした。 井伏鱒二『黒い雨』 654

c さてその女は、グラウンドの中を歩いていたのではない。グラウンドの外側に、屋敷町に接した道がある。道はグラウンドの地面よりも二尺ほど低い。そこを歩いてきたのである。 三島由紀夫『金閣寺』 231

d 草に坐つて、数時間も、こまかい赤土を運ぶ蟻の巢の営みを眺めていたこともある。蟻が私の興味を惹いたのではない。学校の裏手の工場の煙突があげる薄い煙を、永いこと見呆けていたこともある。煙が私の感興をそつたのではない。 三島由紀夫『金閣寺』 375

e 吾一は胸が迫つて、ことばが出なかつた。彼としては、主人にしかられたことや、番頭に足げにされたことがつらいのではない。それもつらいにはつらいけれども、一生「五助」つて名まえで暮らしてゆかなければならないような生活が、なんとしても、たまたまなくなつたのである。 山本有三『路傍の石』 341

f えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えていた。焦燥と云おうか、嫌悪と云おうか——酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでゐると宿酔に相当した時期がやつて来る。それが來たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また脊を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。 梶井基次郎『檸檬』 5

g 「俺は、なにも、あかの他人のものを盗んだんじやない。ちよつと借りただけだ」 立原正秋『冬の旅』 391

h 「いや、これはこれは隊長殿でありますか。わたくしは脱走兵であります。隊にかえるのがいやでありますから、ビルマの坊主になりました。ちよいと友軍の情況を偵察にきたので、営倉に入れられにまいったのではないんです。ハハハ」

竹山道雄『ビルマの豎琴』 158
ところで、ノデハナイの形で(禁止)を表わす用法があ

る。(10) aの例の破線部分からもわかるように、文末ノダ文の〈命令〉の用法に対応するものであろう。井島(二〇一〇・一二)では、文末ノダ文の〈命令〉用法は、文末という何らかのモダリティを担うべき位置にノダが用いられることによって、派生的に生じた用法であると考えた。ノデハナイの〈禁止〉用法も同様に、文末にノデハナイが用いられることによって、派生的に生じたものであると考えられる。これらも、〈禁止〉を表わすというものの、当否否定文、補充否定文の構造は維持している。(10) aは「行く」ことを命じつつも、「谷側へ」行くことを禁じる補充否定文であり、(10) b・eは、相手が「泣こう」「見よう」などとしているのを禁じる当否否定文になっている。

(10) a 「おい、これは危ないぞ」と江藤は強い声で言った。

「すぐ降りるんだ。いいか。俺の言う通りにしろよ。」

先が見えないから全制動をかけて、ゆっくり、まっ直ぐに行くんだ。離れるなよ。眼鏡ははずせ。君先に行け。右は谷だからな。谷側へ行くんじゃないぞ。さあ行け。一番下まで、ゆっくり行くんだ……」

石川達三『青春の蹉跌』94

b 「吾一ちゃん、おまえが悪いんじゃないんだから、泣いたりするんじゃないの。——もう、いいの。もういいの。」

山本有三『路傍の石』77

c 「こちら。あっちへ行け。寄ってくるんじゃない。も

う、なんにもやるものはないんだ。ついてくると承知しないぞ。」

山本有三『路傍の石』418

d 「……こちららは、ただ働きさえすりゃいいんだ。あの手がまちがつていても、口ごたえをするんじゃないよ。くやくしくつても、言いわけをするんじゃないよ。いくら言いわけを言ったって、言いわけで、ランプはともりつこありゃしない。こちららの仕事は、ランプそうじだ。ランプがくもらないようにすれば、それでいいんだ。泣くんじやない。泣くんじやないよ。——いいかい。何ごとも辛抱するんだよ。黙って働くんだよ。——」

山本有三『路傍の石』566

e 「見るんじゃない。学生の分際で高級車をのりまわしやがつて！」理一は吐き捨てるように言うとき妻をうながした。

立原正秋『冬の旅』642

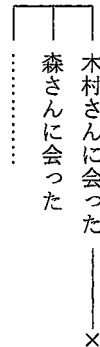
以上、ノデハナイ否定文の機能について検討を加えてきたが、ノデハナイ否定文は、ハナナイ、ハシナイ(、タリシナイ)などと近い働きをしており、野田(一九九七・一〇)でも相互の比較が行われ、ノデハナイは「択一的な否定」、ハナナイ、ハシナイは「譲歩的な否定」という区別があると論じられている。具体的には、(11) a・bのような例を挙げて次のような説明をしている。

(11) a 木村さんに会ったのではない。森さんに会ったのだ。

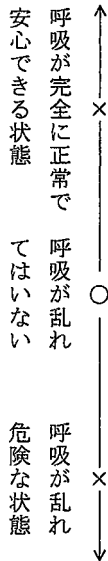
b 医師(「前略」)……あとはご本人の回復力に期待するし

か方法がありません：一応はまだ安定剤が効いていまずし、呼吸も乱れてはいませんが：」

すなわち、(11) aは以下のような「パラディグマティックな関係にある選択肢の一つを否定する択一的な否定を表す」と論じる。



他方で、(11) bは以下のように、「スケール上のある段階に達していることを否定するとともに、その逆の段階でもないことを示す」という。



ノデハナイに関しては、「パラディグマティックな関係にある選択肢の一つを否定する択一的な否定を表す」という説明のしかたも、本稿の主張と大きく隔たるものではない。しかし、なぜ直接正答を示さずに、「選択肢の一つを否定する」必要があるのかについては説明が見られない。あえて

そうするのは、聞き手が当該の選択肢を予想している、あるいはその可能性があつて、話し手はそれを打ち消す必要があると考えるからではないだろうか。そのために、〈聞き手の期待〉を打ち消し事実を提示する（「：ノデハナイ。：ノダ。」）という形がしばしば見られることになるのではないだろうか。

それに対して、ハハナイ、ハシナイなどは、どのような働きをしているのだろうか。(12) aとdはその例だが、これらをノデハナイに置き換えると確かに不自然となり、同じ働きをしているとは言えない。しかし他方で、「スケール上のある段階に達していることを否定するとともに、その逆の段階でもないことを示す」という説明がすべての例にあてはまるとも言えないようである。たとえば、(12) bの「粗末にはしない」はむしろ積極的に大事にすると書いているのであり、(12) dの「許しはしない」はむしろ厳格に罰すると言っていると考えられる。これらの場合も、たとえば、(12) bで「世間によくある夫婦のように」とあるように、〈聞き手の期待〉（この場合むしろ〈世間の期待〉と言ふべきか）を思い浮かべ、それを打ち消すことが、ハハナイ、ハシナイの機能であるようである。

(12) a 「それだというのに、この頃のおれは自分の仕事にばかり心を奪^はわれている。そうしてこんな風にお前の側にいる時だって、おれは現在のお前の事なんぞちつ

とも考えてやりはしない」／＊考えてやるのではない」
のだ。…」

堀辰雄「風立ちぬ」 278

b ……世間によくある夫婦のようにお前を決して粗末にはしない」／＊粗末にするのではない」よ。

谷崎潤一郎『痴人の愛』 84

c 「ダンスに行くにはもつと思いきり派手なものでなけりや、こんな着物じゃ引き立ちはない」／＊引き立つのではない」わ。よう！ 拵えてよう！ どうせこれからちよいちよい出かけるんだから、衣裳がなけりや駄目じゃないの」

谷崎潤一郎『痴人の愛』 187

d 三宅は革命を志している。彼はみずから現行法を敵に廻そうとしているのだ。法律は彼の行為を許しはしない」／＊許すのではない」だろう。

石川達三『青春の蹉跌』 19

しかしそうすると、ノデハナイと同じことになってしまいうのであるが、ノデハナイはある事態に対してメタレベルでコメントをする、「事情の説明」といった場合に用いられ、ハナナイ、ハシナイは(12) a・b が話し手の意志的な行為、(12) c が着物の効果、(12) d が法律の追及する力といった事実の描写に用いられている。というのも、恐らくハシナイは動詞に付き、形容詞・形容動詞・名詞などに付くハナイと対立して、動作的、少なくとも非状態的な事態の描写に用いられるのであろう。

また、(13) a～e のように、タリハシナイの形の用例も少なからず見受けられるが、やはりノデハナイに置き換えると不自然となる。タリハシナイは、動作を例示するタリスルの否定形であり、(13) c・d のように、タリタリシナイと複数の例が列挙されることもある。これらは、ハシナイと置き換えてもそれほど違和感はなく、これらも事態の描写に用いられると考えてもよいだろう。

(13) a こんなふたつのボタンを同時に押さないことにはブザーが止まらないような面倒な時計を、自分の意志で買ったりはしない」／＊買うのではない」。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 407

b 「祖父はとても用心深い人だし、簡単につかまったりはしない」／＊つかまるのではない」わ。…」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 711

c 僕らの生活は、外部から完全に遮断されてい、不思議な監禁状態にいたのに、決して僕らは、脱走を企てたり、外部の情報を聞きこむことに熱中したりしなかった」／＊熱中したのではない」。

大江健三郎『他人の足』 94

d 「世間では、きれいと言うんだ。裁判にもち出した、とつくみあいの喧嘩したりしない」／＊喧嘩するのではない」からね」

曾野綾子『太郎物語』 1263

e 「松井のおっさんだって、昔は酒のませたら会社で

一番つよくつてき、絶対に崩れたりしなかった（ノ＊崩れたのではなかった）んだ。なにしろ軍隊仕込みだからね」

椎名誠『新橋島森口青春篇』172

さて、以上のように、ノデハナイ否定文は、〈聞き手の期待〉あるいは〈発話時以前の話し手の期待〉をノダがとる比較的均質な構文であった。というのも、話し手は当該内容をナイによって打ち消すのであるから、〈発話時の話し手の信念〉ではありえないことになる。それに対して、次に見ようとするノカ疑問文は、話し手には当該内容の真偽が判定不能であることを示すのであるから、その内容は話し手が相ではないかと予想する内容、すなわち〈話し手の期待〉でもありうるし、相手（聞き手）がそうだと云った内容、すなわち〈聞き手の期待〉でもありうる。後者の場合は〈確認〉に近付く。

2 ノカ疑問文

否定文と疑問文とは、久野（一九八三・四）で論じられているように、ある部分は平行していると考えられる。すなわち、命題全体の成立を打ち消したり疑ったりする場合もあれば、何らかの命題の中心的部分の成立は話し手も聞き手も事実として認めながら、その一部を打ち消したり疑ったりする場合もある。その点は、断定文も事情は同じ

である。しかるに、否定文と疑問文との平行性はここまで留まる。否定文の成立の根底には、何らかの肯定的な命題との対比が見られたが、疑問文の成立の根拠には必ずしも肯定的な命題との対比は必要ではないし、疑問詞疑問文に相当するものは、否定文には見られない。それ以外のことは、ますます否定文と疑問文との違いは大きくなるばかりである。だがまず、否定文と疑問文と平行する部分で、疑問文の類型を示し、そこからまずはノカ疑問文が用いられる基本的な枠組を見出したい。

第一に、(14)のような、特に何の〈前提〉も〈期待〉もなく、単に聞き手の持つている情報を尋ねるだけの疑問文がある。これを否定文の類型と対照すれば、対比関係を持つていないという意味で「非対比」と呼び、このようなありかたで成立する疑問文を「成否疑問文」と呼ぶことにしたい。ここで成否否定文は、他の事態との対比の上で成立したが、成否疑問文は他の事態との対比を必要としない点異なる。

(14) バリでは写真を撮りましたか？

第二に、場合によっては(15)cのような〈前提〉のもと、(15)bのような〈話し手の期待〉を背景として用いられる、(15)aのような疑問文がある。この類型は否定文の「対期待対比」に対応するものではあるが、〈話し手の期待〉内容をそのまま聞き手に尋ねるものであり、このような疑問文を、

ある事態を描写するのにそのような表現がふさわしいかどうかを問題にするという意味で「当否疑問文」と呼ぶことにしたい。

(15) a パリでは写真を撮ったのですか？

b 話し手の期待「パリで写真を撮った」

c (前提「パリで何かをした」)

第三に、(16) c のような〈前提〉のもと、その撮った写真は「この写真」であろうという (16) b のような〈話し手の期待〉を背景に用いられる (16) a のような疑問文がある。この場合、「この写真」でないとすれば他のどれかの写真であろうというような含みは持っていない。この類型は否定文の「要素独立対比」に対応するものであるが、話し手の期待内容をそのまま聞き手に尋ねるものであり、このような疑問文を、ある〈前提〉の上でそれに関連する要素を話し手が予想して尋ねるという意味で「補充（独立）疑問文」と呼ぶことにしたい。

(16) a パリでこの写真を撮ったのですか？

b 話し手の期待「パリでこの写真を撮った」

c 前提「パリで写真を撮った」

実は、補充（独立）疑問文には、疑問詞を伴うものもある。その場合も、(17) c のような〈前提〉のもと、その撮った写真はそこにある「いずれかの写真」であろうという (17) b のような〈話し手の期待〉を背景に用いられる、という

ように説明することができる。ただ、この場合、〈前提〉と〈話し手の期待〉とは実質的にはほとんど同じものになっ
てしまっている。このように疑問詞を用いたものを「疑問
詞補充（独立）疑問文」と呼ぶことにしたい。疑問詞を用
いない (17) a のような疑問文を、あえて疑問詞を用いた疑問
文と区別する時には、「非疑問詞補充（独立）疑問文」と呼
ぶことにしたい。

(17) a パリでどの写真を撮ったのですか？

b 話し手の期待「パリでいずれかの写真を撮った」

c 前提「パリで写真を撮った」

第四に、(18) c のような〈前提〉のもと、それは「花子と一緒」だろうという〈話し手の期待〉を背景に用いられる (18) a のような疑問文がある。これは、複数の選択肢の中から話し手がそのうちの一つを選ぶものであり、(18) d のような含意を持つている。この類型は否定文の「要素連動対比」に対応するものであり、このような疑問文を「補充連動疑問文」と呼ぶことにしたい。

(18) a 今日は花子と一緒に来ましたか？／来たのですか？

b 話し手の期待「（聞き手は）今日は花子と一緒に来た」

c 前提「（聞き手は）今日来た」

d 含意「（聞き手は）今日花子と一緒にでなければ一人で来た」

実は、補充連動疑問文にも疑問詞（選択疑問詞ドレ、ド

チラ、ドツチの類)を用いたものがあり、またその他に選択肢をそのまま並べた疑問文がある。前者は「疑問詞補充連動疑問文」、後者は単に「選択疑問文」と呼ぶことにしたい。

(19) a 今日花子と一緒に来ましたか、一人で来ましたか？
／花子と一緒に来たのですか、一人で来たのですか？

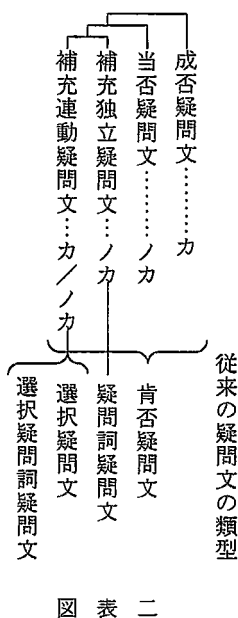
a' 今日はどうやって来たのですか？

b 話し手の期待〔聞き手は〕今日ある状態で来た〕

c 前提〔話し手は〕今日来た〕

d 含意〔聞き手は〕今日花子と一緒にでなければ一人で来た〕

以上の疑問文の類型を、ノダ疑問文となるかどうかに注目すれば、成否疑問文はカ疑問文となり、当否疑問文と補充独立疑問文はノカ疑問文となり、補充連動疑問文(選択疑問文)はカ疑問文・ノカ疑問文両者がありうる。さらにこれを、従来の肯否疑問文、疑問詞疑問文、選択疑問文という類型の対照すれば、肯否疑問文はこれらの類型すべてにわたり、選択疑問詞を除く疑問詞疑問文は補充独立疑問文にあたり、選択疑問文と選択疑問詞疑問文は補充連動疑問文にあたることになる。特に、従来の肯否疑問文は、機能的には実にさまざまな場合があることが了解される(図表二)。



ただし、これによってカ／ノカの使い分けが完全に決定されるわけではない。あくまでこれは原則なのであって、そこにさまざまな要因が絡み合ってカ／ノカの使い分けが実現されるものと考えられる。以下では、ここに絡み合う要因をひとわり見渡してみたい。とはいっても、以下見ていく使い分けは、原則としてノカが用いられる場合に、むしろノカの使用を抑制する要因である。

① 言語行為論的使い分け

ノダで括られる内容は、原則として情報内容であり、原則として情報伝達に関わるもの以外の言語行為を表わす場合には、ノカ疑問文は用いにくい。たとえば、補充疑問文で、疑問詞がない場合も、ある場合も、カ疑問文はその場で《意志決定》を求める表現と考えられる(20) a、(21) a)のに対して、ノカ疑問文はすでに決定された意志を確認する表現と考えられる(20) b、(21) b)。

(20) a 明日デイズニールランドに行く？／行きますか？

b 明日デイズニールランドに行くの？／行くんですか？

(21) a 明日どこに行く？／行きますか？

b 明日どこに行くの？／行くんですか？

田野村（一九九〇・一）でも (22) a ~ e のように「まだ定

まつていないことがらについて、考慮の上で返答するよう相手に求める」場合にはカ疑問文を用い、「相手が知っていることや相手の既定の内心を聞き出そうとする」場合に用いるノカ疑問文は不自然となると論じている。

(22) a どうかね、株で一儲けする気は（ないか／？ないのか）ね。

か）ね。

b 暑いから窓を開けても（いいですか／？いいんですか）？

か）？

c （服を試着して）どう？この服（似合う／？似合うの）？

の）？

d あなたも一緒に行つて（みませんか／？みないんですか）？

すか）？

e 手伝つて（もらえますか／？もらえるんですか）？

ただ、これらの場合はいずれも成否疑問文であり、カ疑問文を用いるのが原則であった。言い換えれば、これらの背後には〈話し手の期待〉は見出されない。逆に言えば、話し手のこうであるという予測を表わす〈話し手の期待〉がある場合には、事実であるかどうかを尋ねる〈情報要求〉

の表現となり、そこにはノカ疑問文が用いられるということであろう。このように、〈意志決定〉等を求める場合にはカ疑問文を用いるという原則が、当否疑問文、補充独立疑問文、補充連動疑問文にも拡張して適用されたのが、(20) a・b、(21) a・b に見られたカ疑問文、ノカ疑問文の使い分けであると考えられる。

ここで、ノによって括られた命題は〈話し手の期待〉を表わすと考えているわけであるが、もしノによって括られた命題は〈前提〉を表わすと考える論者があれば、重大な問題に直面することになる。すなわち補充独立疑問文、補充連動疑問文の背後には、常に〈前提〉がなければならぬ、すなわちある事態に關与する要素が当該のものであるかどうかを問題にするためには、その事態そのものは事実であると認めた上でなければならぬ。しかるに、補充独立疑問文、補充連動疑問文にはノカ疑問文だけでなく実際には常に〈前提〉があると論じることができなくなる。ということとは、ノによって括られた命題は〈前提〉を表わすと言うことはできないことになる。

この使い分けは、その意味的な違いが顕著であるために気付かれやすかったものと思われ、マグローイン花岡（一九八〇）、古座（一九八九・六）、野田（一九九七・一〇）などでも指摘されている。

以上のように、未来の事態であればカ疑問文とノカ疑問文との相違は明確であるが、過去や現在、すなわち確定している（はずの）事態に関して尋ねる場合には、〈意志決定〉ということとはありえないので、カ疑問文とノカ疑問文との働きは中和して、いずれも〈情報要求〉の働きを担うことになり、それとともにカ疑問文は不自然さを感じさせる場合も出てくる。ただ、丁寧語を用いない形（「行った?」）はそれほど不自然ではないように感じられるかもしれないが、これは親しい間柄で、あるいは上位者が下位者に対してぞんざいな言い方を用いる場合であり、いわば文末を省略した形であると見ることもできる。

(23) a 昨日デイズニーランドに行った? / ??行きましたか?

か?

b 昨日デイズニーランドに行ったの? / 行ったんですか?

か?

(24) a 昨日どこに行った? / ??行きましたか?

b 昨日どこに行ったの? / 行ったんですか?

不自然さという以外に、両者の意味の違いを抽出しようとしてもその違いは微妙のものであるが、相手の嘘を突きとめようとする場合（「ほんとに?」）、刑事が容疑者にアリバイを確かめるような場合には、カ疑問文がふさわしいような印象も受ける。これは次に見る、〈介入性〉に関わる語用論的使い分けの問題である。

② 語用論的使い分け

ノダが〈何らかの人物の認識内容〉を表わすとすると、その「何らかの人物」が聞き手であれば、ノダ文を用いるということとは、聞き手の心内に〈介入〉した表現を用いるということになる。これは親しい間柄であれば相手の思いやる表現ともなるが、店員と客のような社会関係の場合にはむしろ失礼な表現ということになる。たとえば、飲食店の店員は客に対して、すでに注文を決定しているような場合でも、カ疑問文しか用いることができない（(25) a・b）のに対して、親しい者同士ではカ・ノカ疑問文いずれも用いることができる（(26) a・b）。

(25) (飲食店の店員が客に)

a 何になさいますか?

b ??何になさるんですか?

(26) (飲食店に一緒に行った親しい目上の人物に)

a 何になさいますか?

b 何になさるんですか?

一方では、(25) a・b の対だけを見ると、先に見た〈意志決定〉を求める表現にはカ疑問文が用いられるということ、で説明できそうに見えるが、(26) a・b の対と比べてみると、それだけで説明できることではないことが明らかとなる。要するにこの両者は、〈意志決定〉を求める場合にも用いら

れるが、むしろ「意志決定」をした後で、その結果を確定した事実として尋ねる場合にも用いられる。日常的にはそれほど厳密な使い分けはしていないかもしれないが、傾向としては(26) aは「意志決定」の要求に、(26) bは決定された意志の質問に用いられるのに対して、(25) aはそのどちらの場合にも用いられるということなのではないだろうか。このように、ノカ疑問文の使い分けの原則が成り立つのは親しい者同士の場合であり、相手の心内に「介入」することを許さない社会的な関係の場合にはカ疑問文しか許されない。

また、教室で教員が生徒に質問をする場合、クイズ番組で司会者が解答者に質問をする場合のように、質問者は答そのものを知らないわけではなく、被質問者が答を知っているかどうかを確認するような場合に用いられる疑問文は、「クイズ疑問文」と呼ばれることもある。このクイズ疑問文には、原則としてカ疑問文が用いられるが、この場合も被質問者の心内に「介入」する表現は不自然であるからであると説明することができる。

(27) a 鎌倉幕府は何年に成立しましたか？

b 鎌倉幕府は何年に成立したんですか？

恐らくこのような現象を初めて指摘した吉田（一九九四・二）では、これまでに見た飲食店での注文の場合と、教室での質問の場合とを、「実質的疑念による制度性発問」で

ある「尋問」と、「形式的疑念による制度性発問」である「試問」と呼び、「実質的疑念による自由性発問」である「借問」と区別するが、「尋問」と「試問」、すなわち「制度性発問」（「例外なく質問行為が行われるような場面においてなされる質問」）の場合にはカ疑問文が用いられ、「借問」すなわち「自由性発問」（日常的な談話の中などで、ふと思いついてなされるような質問）の場合にはノカ疑問文が用いられると論じている。

(28)（聞き込み中の刑事が目撃者に）

a その男はどんな服装をしていましたか？

b？その男はどんな服装をしていたんですか？

(29)（理科室で実験を終えたあと、先生が授業のまとめとして）

a 中川くん、水溶液Aに水溶液Bをまぜたら何色の沈

殿ができましたか？

b＊中川くん、水溶液Aに水溶液Bをまぜたら何色の沈

殿ができましたか？

そのうえで、(29)のような状況で(29) bのようにノカ疑問文が用いられることも皆無ではないが、それは「指名された中川くんがイジイジと答えられずにいるときに、業を煮やした教師が再び質問するような場合」であると指摘するが、これは感情的になったあまり生徒の心内に「介入」する表現を用いたと了解することができる。

③統語論的使い分け

ノダ文は、統語論的には、「命題内容」＋ノによって名詞化するることによって、ひとまとまりの内容であることを示し、ダによって述語化（吉田（一九八・三a、b））されたものであり、それが担う意味機能が（何らかの人物の認識内容）ということであった。すなわち、名詞述語文の場合には、（命題全体をひとまとめにするわけではないが）最初から述語が名詞なのであり、再度名詞化する必要はない。たとえば、動詞述語のノカ疑問文の(30)aは（意志決定）を表わすが、動詞述語のノカ疑問文(30)b、名詞述語のカ・ノカ疑問文の(31)a・bは（情報確認）となる。ただし、名詞述語とノカ疑問文とが重なる(31)bは（意外性）、（非難）、（呆れ）といったニュアンスが伴う。

(30)（風邪をひいて寝込んでゐる夫に）

a 明日は休みますか？

b 明日は休むんですか？

(31)（同じ状況で）

a 明日はお休みですか？

b 明日はお休みなんですか？

このように、ノカ疑問文の使い分けの原則が原則通りにはたらくのは動詞述語文、形容詞述語文にであって、名詞述語の場合はそれが緩和されると考えられる。

また、補充疑問文は、焦点を述語として文末に置く分裂文を作ることができるが、焦点はしばしば名詞であり、分裂文は名詞述語文の形となる。さらに、前提部分はノによって名詞化され、主語となるのであるから、分裂文にさらにノカを加えると、二重に名詞化が施されることになる。そういう意味でも、分裂文はノカ疑問文が原則であると考えられる(32)a。分裂文をノカ疑問文にすることもそれほど不自然ではないが、その場合（詰問）、（非難）といったニュアンスが伴うことになる(32)b。疑問詞を用いた補充疑問文の場合は、文末に疑問詞が来ることになるが、この場合も事情は同じである(33)a・b。

(32) a 昨日デイズニーランドに一緒に行ったのは花子ですか？

b 昨日デイズニーランドに一緒に行ったのは花子さんですか？

(33) a 昨日デイズニーランドに一緒に行ったのは誰ですか？

b 昨日デイズニーランドに一緒に行ったのは誰なんですか？

このように、名詞述語文であることによってノカ疑問文がキャンセルされることに關しては、野田（一九九七・一〇）で論じられている。

以上のように、ノカ疑問文は、〈話し手の期待〉ないし〈聞き手の期待〉を命題とする疑問文であると考えられるが、あえて事実であることがわかっている内容を命題にする場合がある。聞き手が行った話し手にとって望ましくない行為を命題にする場合には、〈叱責〉といったニュアンス(34 a・b)が、聞き手の愚かな行為を命題にする場合には、〈呆れ〉といったニュアンスが(34 c)、聞き手が決して望まないと思われる事態を命題にする場合には、〈威嚇〉といったニュアンスが(34 d・f)伴うことになる。

〈叱責〉

(34) a 安坂さんのお葬式にこれた人が、どうして母のもとに立ちよれなかったのですか。これは、あなたの意志でよれなかったのか、それとも、少年院の規則でよれなかったのか、母にはわかりませんが、いずれにしてもひどいと思います。あなたは、佐倉さんのアパートに泊ったというではありませんか。なぜ母のもとに泊れなかったのですか。あなたは、再婚した母を、そんなにいやなのですか。母にはそうとしか思えません。

立原正秋『冬の旅』1074

b 「でも、あんな向こう見ずなことをされますと、わたくし、心ぼそくなつてしまいます……ほんとうに、なんてことをしてくれたのですか……」

山本有三『路傍の石』209

〈呆れ〉

c 「これはあきれた。だれも知らないのですか。シマのあるウマのことをなんていうんでしたかねえ？」

井上ひさし『ブンとブン』52

〈威嚇〉

d 「眼が痛いから電気を消しますよ。」と云うと、彼女はフンゼンとして沈黙って出て行つた。やがて梯子段をトントン降りて行つたかと思うと、「私達は貴女を主人にたのまれたのですよ。こんな事知れていいのですかッ！」と云う声がきこえている。

林芙美子『放浪記』419

e 「あなた、非常識な人ですな。家宅侵入罪で逮捕されたいのですか」

井上ひさし『ブンとブン』106

f 「おやおや。本当に何ごともお望みではないのですかな」やや皮肉っぽい微笑を浮かべた老人が、疑わしげにそう言った。「あなたには、会いたい人たちが居られるのでは」

筒井康隆『エディプスの恋人』435

他方で、相手の発話を受けて、何らかの事実を初めて知ったという場合には、〈納得〉といったニュアンスが伴うことになる(35 a・c)。

(35) a 「求婚の一件か、どういうことにもなるわけがない。やめたよ、ぼくは。こないだ、あの墓場のところで、そういったじゃないか。」「あれはやっぱりその意味だ

ったのですか。」

石川淳「処女懐胎」 514

b 「あ、そうですか。そんなことがあったのですか。で、おじさんの病気は、その後、どうなんです。」

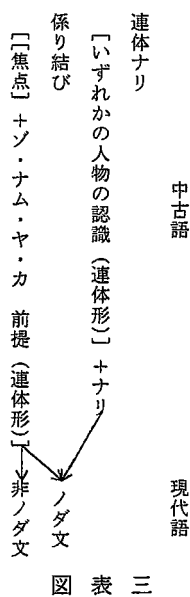
山本有三『路傍の石』 582

c 「そ、それじゃ先生は、そういう理由でおやめになったのですか。」
山本有三『路傍の石』 691

ここで、現代語のノダに対する、中古語の対応表現について考えてみたい。この問題を本格的に究明するのは次の機会のこととして、今は大まかな把握をすることで留めておきたい。もちろん、中古語の連体ナリが直接現代語のノダの対応物であることは見やすい。しかし、それだけでは現代語のノダの使用頻度の高さには追いつかない。それ以外にも現代語のノダに流れ込んだ表現はないものだろうか。そこで思い至るのが、係り結びである。そのなかでも、ゾ・ナム・ヤ・カが連体形で結ぶということである。ゾ・ナム・ヤ・カは焦点を表示するものと考えられ、それ以外の部分は前提となつているものと思われる。すなわち、文全体が連体形で結ばれるのは、前提であることを表わしている

と了解されるのである。というのも、中古語では、連体ナリは疑問文中では用いられないが、現代語のノダはノカという形で疑問文中でも用いられる。中古語の疑問文は、係助詞ヤ・カと疑問詞とを用いて連体形で結ぶ、係り結び表現が用いられる。であるとすれば、中古語の疑問文（の

少なくとも一部）は、現代語のノカ疑問文に対応しそうである。そして中古語の疑問係り結びは、焦点―前提関係を表わしていると考えられる。そうであれば、それに対応する現代語のノカ疑問文も、焦点―前提関係を受け入れる素地がなければならぬ。さらにそのような素地があるのであれば、中古語のゾ・ナムを用いた断定文に対応する、現代語のノダ断定文があると考えられるのも自然なことだろう。ただ、焦点―前提関係を受け入れる素地があるということは、焦点―前提関係を表わすことがノダ文の本質であるということではない。現代語にはノカ疑問文以外の疑問文もあるのだから、すべての係り結びがノダ文に対応するわけではない（図表三）。



とはいうものの、以上の考察は、中古語の語法が、直接現代語の語法に結びついたというわけではない。係り結びは中古の末には崩れはじめ、中世に入るとゾやカが終助詞化して残る他はおよそ姿を消すことになる。またそれと連

動して、中古にも恐らく感動表現として始まった連体形終止が、中世になると終止用法全体に広がり、連体・終止同形となる。そうになると、係り結びが連体形で結ぶという意味も失われてしまうわけである。それに対して、ノダ文は近世に入って少しずつ勢力を拡大して、現代語のような広がりを獲得したもののようである。このように、中古語と現代語とは断絶があり、直接、表現の受け渡しがあつたものとは考えられない。とはいふものの、言語表現に必要な文法的枠組の普遍性という次元で、両者に対応する表現の仕組みがあると考えることは、十分に可能なことだろう。

3 ノダロウ推量文他

推量文にノダが上接したものは、ノダロウの他、蓋然性推論と言われるノカモシレナイ・ノニチガイナイがある。兆候性推論と言われるものは、*ノダヨウダ・*ノニソウダ（連用形ソウダ）はないが、ノラシイ・ノダソウダ（終止形ソウダ）は可能である。推量文には、ノダが下接することもあるが、*ダロウノダはなく、蓋然性推論のカモシレナイノダ・チガイナイノダ、兆候性推論のヨウナノダ・（連用形）ソウナノダ・（終止形）ソウナノダ・ラシイノダはいずれも可能である。ただ、ここでは主に、推量文に上接するノダに関して検討を加えることにしたい。

まず、ノダロウ推量文について検討する。ここでノダロウはノダの意味機能とダロウの意味機能が組み合わさったものであると考えられるが、〈何らかの人物の認識〉、ここでは〈話し手の期待〉を表わすと思われるノダと、〈推量〉を表わすダロウとは、一見その働きが近いように思われる。すなわち、〈推量〉が話し手が発話時に行う推論という心的行為を表わすとすれば、〈推量〉表現の命題部分は、話し手が〈推量〉した内容となり、〈話し手の期待〉と紙一重のものということになってしまう。そうであれば、ノダロウは剰余表現ということになり、ダロウと違いのないものとなってしまうはずである。しかし果たしてそうだろうか。

まず、(36) a ~ e はダロウが用いられている文であり、これらをノダロウに代えると不自然となる。そのことだけでなく、ノダとダロウとの働きには違いがあるということになるが、それはどのようなことなのだろうか。たとえば (36) a では「彼女（＝葉子）はただ病人に心を奪われていた」（確定条件）ので、「島村の方へ振り向き」（仮定条件）でも、「窓ガラスに写る自分の姿は見え、窓の外を眺める男（＝島村）など目にも止まらなかった」だろうと推量しているわけであるが、ダロウ推量文は、根拠として確定条件や仮定条件を受けて、そこから非実現の結論を導くものである（現実にも、島村が見ていることは「葉子は気づ」かなかつたのであるが、新たな条件を加えて推量し直している）。ここ

で推論の方向は、「何かに心を奪われていれば、物事に気が付かない」、「そちらの方に向けば、そのことに気が付く」（こちらは逆接）という因果関係の方向と、理由―結論という推論の方向が一致する「順行推論」が行われている（井島二〇一〇・三b）参照。

(36) a こんな風に見られていることを、葉子は気づくはずがなかった。彼女はただ病人に心を奪われていたが、たとえ島村の方へ振り向いたところで、窓ガラスに写る自分の姿は見えず、窓の外を眺める男など目にも止まらなかっただろう。

川端康成『雪国』16

b ナオミの奴、今頃はもうしているだろう。寝間着一枚で放つたらかして来たのだから、よもや何処へも出られる筈はないだろう。

谷崎潤一郎『痴人の愛』418

c 「小間使いには大へん都合のいいのがある、内ですべていた仙太郎の娘がお花と云って、今年十五になっているから、あれならお前も気心が分って安心して置けるだろう。飯焚きの方も心あたりを捜しているから、引越し先が極まるまでには上京させる」と、為替と同封の母の手でそう云って来ました。

谷崎潤一郎『痴人の愛』444

d これらの凡庸で退屈な長文の手紙を引用するわけにはいかなかったのであるが、書簡集につき、全文を注意深く読んだ人は、そこにモオツアルトの音楽に独特

な、あの唐突に見えていかにも自然な転調を聞く想いがするであろう。音楽家の魂が紙背から現れてくるのを感じるだろう。

小林秀雄「モオツアルト」70

e （革命なんか来やしない）と彼は信じていた。三宅は来ると思っている。それは予想ではなくて、単なる想像にすぎない。おそらく社会はまだ五十年も六十年もこのままで過ぎて行くだろう。

石川達三『青春の蹉跌』11

次に、(37) aとeはノダロウが用いられている文であり、これらもダロウに代えたと不自然である。これらの推論のありかたを確認してみると、たとえば(37) aでは、「女は臉を落して黙った」という事実を「物分りよくうなずく習わしが女の身にしてみている」からであろうと推論しているわけである。因果関係からいけば「物分りよくうなずく習わしが身にしてみているれば、臉を落して黙る」ということになるが、推論はむしろ結果部分を理由として、原因部分を結論としており、因果関係としての原因―結果と推論としての理由―結論とが逆転している「逆行推論」となっている。しかし、ノダロウ推量文が逆行推論となるのは、むしろ派生的なことと了解すべきかもしれない。すなわち、推論の理由となる結果は話し手に確認できる事実であるから、結論として導かれる原因も、話し手は直接知らないだけで、事実でなければならぬ。このように、何らかの（原因と

なるべき」事実があるが、話し手はそれを知らないから、話し手に確認できる根拠をもとに〈推量〉する、というありかたがノダロウ推量文の働きであると考えられる。

(37) a 女は瞼を落して黙った。島村はこうなればもう男の厚かましさをさらけ出しているだけなのに、それを物

分りよくうなずく習わしが女の身にしみているのだろう。

川端康成『雪国』 31

b 子供の群が溝の氷を抱き起して来ては、道に投げて遊んでいた。脆く砕け飛ぶ際に光るのが面白いのだろう。日光のなかに立っていると、その氷の厚さが嘘のように思われて、島村はしばらく眺め続けた。

川端康成『雪国』 75

c どうもさつきからの彼女の様子では、今夜は己と踊りたくないのだろう。己がもう少し巧くなるまでは厭なのだろう。

谷崎潤一郎『痴人の愛』 256

d おそらく老人もそれをよく承知していて、あえてその研究成果を世間には公表せずに手もとにとどめているのだろう。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 151

e 「こんなよく晴れた日にカーテンを閉ざして暗い部屋にとじこもらねばならんというのは、君のような若い人間にとってはきつとつらいことなのだろうな」と大佐は言った。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 291

そのように考えてくると、ノダロウ推量文の働きからダロウの〈推量〉の働きを差し引いて残るノダの働きは、結論として導かれる内容（命題部分）が、「話し手は直接は知らないが何らかの事実」があり、それを言い当てようとしている、ということになる。

以上のような結果は、田野村（一九九〇・一）の、「 β のだろう」は、「のダ」と「だろう」が組み合わせられたものであるから、あることがら α の背後の事情が β であることや、問題の実情が β であることを、推量して述べたり、推量や事実についての確認を聞き手に求めたりするのに用いられる」という議論を支持するものであるように思われる。

しかしながら、たとえば第5節で論じる、同じように〈推量〉を表わすノデハナイカ否定疑問文では、知られていないが事実であると思われること、あるいは「背後の事情」を命題にとるということはなく、何らかの根拠をもとに話し手が推論した内容にノデハナイカが付される。ということとは、「話し手は直接は知らないが何らかの事実が存在する」というノダロウ推量文の特徴は、ノダロウ推量文に固有のものであるということになりそうである。ではなぜ、ノダロウ推量文に限って、そのノダの働きが「話し手は直接は知らないが何らかの事実が存在する」ことを示すこと

になるのだろうか。その一端は、ノダロウ推量文が、ノダの働きとダロウの働きとが合わさったものであることに求められるのではないだろうか。すなわち、ダロウが「推量」の働きを持っていることは動かしようがないが、ノダも「話し手の期待」を表わしているというだけでは、ダロウ推量文とノダロウ推量文との違いが明確にはならないし、ノダロウ推量文の中のノダとダロウとの働きの違いも明らかではない。そこで、ノダの働きが、単に「話し手の期待」を表わすに留まらず、〈事実であることに対する話し手の期待（予想）〉を表わすというように特殊化されたのが、ノダロウ推量文なのではないだろうか。

そのような観点に立てば、ニチガイナイ推量文とノニチガイナイ推量文との違い、カモシレイ推量文とノカモシレイ推量文との違いも同じように説明できそうである。

(38) a d はノニチガイナイ推量文、(39) a e はノカモシレイ推量文の例であるが、命題が「話し手の期待」であることは言うまでもなく、「話し手は直接は知らないが何らかの事実が存在する」という特徴も持っているように思われる。

(38) a それでも私は、便所を覗いたり、湯殿を調べたり、なお念のために勝手口へ降りて、流しもとの電燈をつけて見ました。すると私の眼に触れたのは、誰かが盛んに喰い荒らし、飲み荒らして行ったらしい正宗の一

升^{びん}と、西洋料理の残骸でした。そうだ、そう云えばあの灰皿にも煙草の吸殻が沢山あった。あの同勢が押しかけて来たのに違いないのだ。……

谷崎潤一郎『痴人の愛』 359

b 早くこのひと、帰らねえかなあ、手紙だなんて、見えすいているのに。へへののもへじでも書いているのに違いないんです。

太宰治『人間失格』 98

c 君の心の中には苦い灰汁^{あくじゆ}のようなものが湧き出てるのだ。漁にこそ出ないが、本当を云うと、漁夫の家には一日として安閑としていい日ではないのだ。今日も、君が一日を画に暮らしていた間に、君の家では家中で忙しく働いていたのに違いないのだ。

有島武郎『生まれ出づる悩み』 181

d 彼のかかげる大義名分はどこかに嘘^{うそ}があるからこそこんなみごこさをもっているのにちがいないのだ。

開高健『裸の王様』 320

(39) a 「——だが、この明りの影の工合なんか、まるでおれの人生にそっくりじゃあないか。おれは、おれの人生のまわりの明るさなんぞ、たったこれ^{だけ}許^{ゆる}りだと思っっているが、本当はこのおれの小屋の明りと同様に、おれの思っているよりもっともつと沢山あるのだ。そうしてそいつ達がおれの意識なんぞ意識しないで、こうやって何気なくおれを生かして置いてくれている

の**か**も知れないのだ……」

堀辰雄『風立ちぬ』 337

b 柏木と私はネットの外れの遊動円木にいたのである。

女の顔を窺った私は愕きに搏たれた。そのけだかい顔は、柏木が私に説明した「内鬚足好き」の女の人相に、そっくりであつたからだ。しかし後になつて私はこの愕きを莫迦らしく思うのだが、柏木はその顔をずっと前から見知つていて、夢みていたの**か**もしれないのである。

三島由紀夫『金閣寺』 232

c とたんに、重大な思い違ひをしていたことに、気づかされたのだ。女の裸についての、おれの解釈は、どうやらあまりに一方的すぎたようである。彼を毘にかけようという下心が、まるで無かつたとは言えないにしても、あれは案外、生活の必要からきた、ごく日常的な習慣だつたの**か**もしれないのだ。

安部公房『砂の女』 103

d 俊介は局長に一種の清潔さを感じた。じつさいに彼の案の検討を放棄したのは前任の課長である。ひよつとして、局長が課長にそれをわたしたのは俊介が無視した面子の体系を是正する意味をふくめていたの**か**もしれないのだ。

開高健『パニック』 99

e 彼は夢を見ているようだった。夢を見ることは悪いことではない。その夢こそが**つ**らい練習に耐え、困難に耐える力を与えてくれるの**か**もしれないのだ。

沢木耕太郎『一瞬の夏』 259

また、(40) a のノカシラ推量文も以上に準じた用法であると言えそうである。

(40) a 「どうしたんだろう、まあ瀬川君は——相変らず身体具合でも悪いのかしら」とこう銀之助は自分で自分言つて見た。

b 若しかしたら、自分のした事が善事だと云う変な意識があつて、それを本統の心から批判され、裏切られ、嘲られてゐるのが、こうした淋しい感じで感ぜられるのかしら？

c ああ、また、僕はなんだか悲しそうな様子をしてしまった。しかし、僕は本当はそんなに悲しくはないんですよ。だって僕は、あなた方さえ知らないような生の愉悅を、こんな山の中で人知れず味つてゐるんですもの。でも一体、何時ごろあなた方はこちらへいらつしやるのかしら？

d 「私があなたの心に応えることができないから、それでああなたの心は固く閉ざされてしまふのかしら？」

e 「でも、好太郎さんのコブツは、鳥を一羽も捕つてくれなんだすなあ。仕掛の仕方が悪かつたのかしらん」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 624

井伏鱒二『黒い雨』 125

伝聞表現の場合は、ノラシイは直観的には自然なのだが、

実例は見出しがなかった。それに対して、ノダソウダは、

(41)(41) a eのように、多く見つけることができた。

a 殆ど三年半ぶりで見るこの村は、もうすっかり雪に埋まっていた。一週間ばかりも前から雪がふりつづいていて、けさ漸つとそれが歇んだのだそうだ。

堀辰雄「風立ちぬ」 305

b このピンク色は、熊谷の紹介に依ると青山の方に住んでいる実業家のお嬢さんで、井上菊子と云うのでした。もはや婚期を過ぎかけている二十五六の歳頃で、——これは後で聞いたのですが、二三年前或る所へ嫁いだのに、あまりダンスが好きなので近頃離婚になったのだそうです。

谷崎潤一郎『痴人の愛』 250

c その画学生は、堀木正雄といつて、東京の下町に生れ、自分より六つ年長者で、私立の美術学校を卒業して、家にアトリエが無いので、この画塾に通い、洋画の勉強をつづけているのだそうです。

太宰治『人間失格』 71

d 私はその人から鄭寧に先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或仏へ花を手向けに行く習慣なのだそうである。

夏目漱石『こころ』 22

e 能島さんは「僕は責任をもって、みなさんを家庭まで送ります」と云って、草津の漁師に掛合つて船を仕

立てさしてくれたのだそうだ。井伏鱒二『黒い雨』 198

これらは、ノダを取り去って、単にソウダとしてもほとんど違いは感じられない。あるいは、これはノダまで含めて伝聞の内容であるということなのかもしれない。すなわち、たとえば(41) aでは、「一週間ばかりも前から雪がふりつづいていて、けさ漸つとそれが歇んだのだ」そうだ。」というふうに了解すべきなのかもしれない。

4 ノダロウカ疑問文

ノダロウカ疑問文には、第2節で論じたノカ疑問文と、第3節で論じたダロウ推量文との問題が複合していることは見やすい。しかし、疑問の働きはほぼそのままノダロウカ疑問文にも見出されるとしても、推量は断定文の中で用いられるのと同じように疑問文の中でも働けるわけではない。

まず、疑問文の類型とカ／ノカの使い分けに関しては、ダロウカ／ノダロウカはそのまま受け継ぐようである。すなわち成否疑問文(42) aはダロウカをとり、当否疑問文(42) bはノダロウカをとる。さらに、補充独立疑問文(42) c・c'はノダロウカをとり、補充連動疑問文(42) d・d'はダロウカ・ノダロウカいずれもとる。(話し手の期待)や(前提)あるいは(含意)のありかたも、カ疑問文

・ノカ疑問文と同じであると考えてよさそうである。

(42) a パリで写真を撮ったのだろうか？

b パリで写真を撮ったのだろうか？

c パリでこの写真を撮ったのだろうか？

c' パリでどの写真を撮ったのだろうか？

d 今日は花子と一緒に来ただろうか？／来たのだろうか？

d' 今日は花子と一緒に来ただろうか、一人で来ただろうか？／花子と一緒に来たのだろうか、一人で来たのだろうか？

d'' 今日はどうやって来たのだろうか？

ちなみに、田野村（一九九〇・一）は、(43) a・b の表現の違いについて、「く来るだろう」という文は、これから虫が入って来るのを待ち受けているような状況で用いられるものである。まだ実現していないできごとについて、思いを巡らせているだけである。これに対し、「く来るのだろう」は、虫が入って来ているという事実が実際にある状況において、虫の侵入場所はどこかという話し手の疑念を表現するものである」と説明している。

(43) a 虫はどこから入って来るだろうか？

b 虫はどこから入って来るんだらう？

ただ、(43) b にしても、「これから虫が入って来るのを待ち受けているような状況で」用いることは可能である。した

がって、ノ（ダ）の働きを「虫が入って来ているという事実」を表わすことである、と言うことはできない。ここで振り返るべきは、第2節の①言語行為論的使い分けの議論であろう。ノダロウカ疑問文が用いられるのは、すでに「虫が入って来ている」にせよ、「これから虫が入って来る」にせよ、そのことを話し手が所定の事実として認識している場合である。それに対して、ダロウカ疑問文が用いられている(43) a は、〈意志決定〉をうなしているとは言えないものの、未確定の事態として認識している場合と言うことができるのではないだろうか。

次に、疑問文中でダロウがどのような働きをしているかを考えなければならない。とはいっても、この問題は一朝一夕に解決できるような単純な問題ではなく、これまでいくつもの解決案が提示されてきたが、どれも十分に満足できるものではなかった。ここでもおよその方向を提示するに留めておきたい。

この問題に関しては、森山（一九八九・八）において、(44) a 「と聞く場合は、「このローストチキンがおいしいかどうか」に関して、相手が食べたことがあるとか、噂を知っているととか、いずれにせよ、何らかの情報を持っていると判断されなければならない。すなわち、二人とも初めてのレストランで、話し手と同様に「このローストチキンがおいしいかどうか」わからない相手に対する発話なら、この

電話はきわめて不自然である。むしろ、(44) b「のように言う方が自然であろう」という指摘が見られた。

(44) a このローストチキンはおいしいか？

b このローストチキンはおいしいだろうか？

井島（一九九四・三）でも、「文脈上、相手の知識を尋ねる「教える」のような動詞と、相手の推論を促す「推理する」のような動詞によって、疑問文を（知識要求）か（推論要求）かに誘導すると、次のように、（知識要求）である(45) aの場合は疑問文の方が、（推論要求）である(45) bの場合はダロウカ疑問文の方が自然である」と論じたことがある。

(45) a 教えてください。誰が犯人ですか／誰が犯人でしょう？

b 推理してください。??誰が犯人ですか／誰が犯人でしょう？

疑問文にダロウカが用いられている場合は、自問の場合は話し手自身が推論を行っていることを、聞き手への質問の場合は聞き手に推論を求めていることを表わしていると言っているのではないだろうか。話し手がそのように推量しているのではなく、解決すべき問題として提示しているに過ぎないことは、(46) d・eのように、互いに対立する内容が並立されていても少しも不自然ではない。

(46) a 窓の金網にいつまでもとまっていると思うと、それ

は死んでいて、枯葉のように散ってゆく蛾もあった。壁から落ちて来るのもあった。手に取ってみては、なぜこんなに美しく出来ているのだろうか」と、島村は思った。

b 「尼さんばかりが寄って、幾月も雪のなかでなにを

してるんだろかね。昔この辺で織った縮でも、尼寺で織ったらどうかね。」 川端康成『雪国』 245

c あの、Kの親戚の学生と云うのは誰だろうか？ その

学生の知っているのでも二三人は関係がある？ 二三人？……浜田？ 熊谷？……怪しいとすればこの二人が一番怪しい、が、それならどうして二人は喧嘩

しないのだろう。 谷崎潤一郎『痴人の愛』 312

d 魚は水の底にじっと眠っているのだろうか？ それと

もどこかべつの洞窟の中を泳ぎまわっているのだろうか？あるいは我々の気配をかぎつけて今こちらに向って進んでいるところなのだろうか？

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 1070

e あの二人組が私の腹を裂いたのはいいたいいつのことだったのだろうか？それは私が明けたのスーパーマーケットのコーヒー・スタンドに座っていたより以前だったのだろうかあとだったのだろうか？私はいつ小便をしたのだろうか？そして私は何故小便のことをそんなに気にするのだろうか？

5 ノデハナイカ否定疑問文

否定疑問文は、田野村（一九八八・三）によつて、三類に分けられたが、そのうち第Ⅱ類がノデハナイカ（以下、ンデハナイカ・ノジャナイカ・ンジャナイカなども含める）と、ノダが組み込まれたものである。またその用法としては、第Ⅰ類のデハナイカが事実命題に付くのに対して、第Ⅱ類は推量命題に付くということになっている。ちなみに第Ⅲ類は、否定と疑問とが分析的に結びついたもので、否定と疑問とが複合して独自の働きを担うようになった第Ⅰ類、第Ⅱ類とは異なっている。

否定疑問文に関しては、井島（二〇〇六・一〇）で論じたことがある。ノデハナイカ否定疑問文に限らず、否定疑問文には肯定的な「傾き・予測」が含まれているということは、多くの指摘がある。たとえば、仁田（一九九一・六）では、(47) a・bのような例を挙げて、否定疑問文には肯定的な「傾き・予測」が含まれ、肯定疑問文には否定的な「傾き・予測」がふくまれることがありと論じている。

(47) a この山、昆虫がいっぱい、いそうだとは思いませんか？

「イソウダト思ウデショウ」

b この山に、昆虫がいっぱい、いそうだと思ひます？

「イソウダト思ワナイデショウ」

ここで「傾き・予測」と呼ばれていることは、まさに〈話し手の期待〉のことである。すなわち、ノデハナイカ否定疑問文がとる命題も〈話し手の期待〉を表わしていると考えられる。しかしなぜ、肯定的な〈話し手の期待〉を含んでいるのに、否定が用いられるのだろうか。

ここで、(48)のような例を見てみたい。吾一のうなり声を聞いて話し手は、吾一が「どうかした」という予想（Ⅱ〈期待〉）を持ったが、それは間違っている可能性を持つ。実際相手に「いいえ、なんでもないんです。」とすぐに打ち消されるわけであるが、話し手は聞き手の心的世界を話し手の心的世界の中に埋め込んで、要するに聞き手の応答も念頭に置きつつ発話するということがあるのではないだろうか。すなわち、「吾一がどうかした」という〈話し手の期待〉を、聞き手は「吾一がどうかした」のではない」「吾一はなんでもない」と打ち消す可能性がある。このように、〈話し手の期待〉は、聞き手の心的世界に投射され、その聞き手の心的世界は話し手の心的世界に埋め込まれるというように、二重に埋め込まれた表現がノデハナイカ否定疑問文であると考えられる（図表四）。

(48) そんなあいさつをかわしていた時、突然、吾一が「うむ。」と大きな声でうなりだした。「吾一ちゃん、どうかしたんじゃないんですか。」「いいえ、なんでもない」

いんでございます。今夜はどうしたのか、ときどきあんな声を出しますんで。」 山本有三『路傍の石』 208

話し手の心的世界

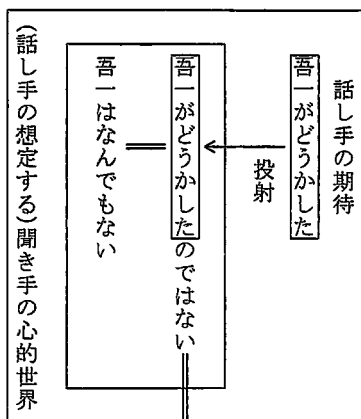


図 表 四

このように、ノデハナイカ否定疑問文がとる命題は「話し手の期待」を表わすが、話し手が予想していることを積極的に押し出す場合もあるが、反対に間違っている可能性を示して、いわば引きの姿勢を示す場合もある。たとえば、面と向かって相手に尋ねる時には、(49) a のように否定疑問文を用いるのが自然だが、それは相手がそうではないと打ち消す可能性を示すためであると考えられる。それに対して、電話の冒頭で相手を確認する場合には、(49) b のように否定疑問文を用いない方が自然であるが、それは話し手が

相手が違うかもしれないと思うような不用意な電話のかけ方をしているとすれば、そちらの方が失礼にあたるからであると考えられる。

(49) a 「どこかでお見かけしたような……」男は呟くように言って首をかしげた。「もしかしたら、あなたは六さんじやありませんか」 三浦綾子『塩狩峠』 651

b 「もしもし、原田さんのお宅ですか？」先方の受話器があげられたとたんに、ぼくはできるだけ生真面目に、はきはきした口調をこころがけながら、大きな声で言った。 和田誠『新橋烏森口青春篇』 421

以上のように、ノデハナイカ否定疑問文は、命題に「話し手の期待」をとるとはいえ、ほとんど推量に近いものである。他にもノデハナイカ否定疑問文には以下のような例を見出すことができる。

(50) a そうして私はいつしか「田園交響曲」の第一楽章が人々に与える快い感動に似たもので心を一ぱいにさせていた。そうして都会にいた頃の私はあんまり自分のぼんやりした不幸を誇張して過ぎて考えていたのではないかと疑い出したほどだった。

b 彼女はその画家のことはそれっきり何人にも私に話さなかったが、ひょっとしたら彼女はそれまでに何遍もその画家に出会っており、そして私の知らない間に

堀辰雄「美しい村」 33

互に親しくなだしているのではないかと云うような懸念さえ私は持ちはじめていた。

堀辰雄「美しい村」 122

c ナオミもカフェエにいた頃とは別人のようになりはしたものの、氏や育ちの悪いものは矢張どうしても駄目なのじゃないかと、私もそう思い、彼女自身も一層強くそれを感じたに違いありません。

谷崎潤一郎『痴人の愛』 64

d ナオミが使を寄越さないのは、事に依つたら事件を軽く見ている証拠で、二三日したら解決がつくとたかを括っているんじゃないかな。

谷崎潤一郎『痴人の愛』 475

e 不当に無視された古今新古今の形式美は、現代に於ける形式の混乱に、無言の復讐をしてはいないか。形式美は遂に形式美より他のものを現さぬという粗末不遜な考えの極まるところ、僕等は心の美しさも失わざるを得ないのではないか。

小林秀雄「光悦と宗達」 301

f 私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変つたのだろう。いやどうして向うがこう変つたのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗って、急に世の中が判然見えるようにしてくれたのではないかと疑いました。

夏目漱石『こころ』 302

g しかし異性に対する男の愛とは、本来一時的なものに過ぎず、また一時的であつてもいいのではないかと彼は思つていた。

石川達三『青春の蹉跌』 91

h 「どこか悪いの？」加藤は花子を助け起そうとした。「少し休んだらどうなんだね。働き過ぎたのではないのかね。お腹でもいたい……」花子は首をふつた。

新田次郎『孤高の人』 1342

6 ノダッタ断定文

ノダッタ断定文は、これまでに挙げてきた表現とはかなり質的に異なっている。まず第一に、現われる環境が、多くは物語の地の文であり、会話文に用いられる条件はかなり制約されている。地の文のノダッタは、文末のノダに井島（一九八・三）で「相對時過去」と呼んだタが合わさつたものと考えられるが、相對時過去のタはノダに限らず、物語の地の文には広く用いられるものであり、地の文のノダには特に文末のノダと大きく異なつた特徴は見られなと思われる。ただ、井島（二〇一〇・一二）で文末ノダ文に関して論じた文末ノダ文の二類型のうち、「直前の話し手の認識とのギャップ」は考えられない（今気が付いた、思ひ出した、といった意味合いのノダは地の文にはなじまな

い)ので、「聞き手の認識とのギャップ」(聞き手(＝読者)は知らないので教えてあげる)を表わすノダッタに限られる。ここでは若干例を挙げるに留める。

(51) a 駒子に会ったら、頭から徒労だと叩きつけてやるうと考えると、またしても島村にはなにか反って彼女の存在が純粹に感じられて来るのだった。

川端康成『雪国』 93

b 江藤はそうした世上の動きから、死刑廃止論からんだ出題を予想し、充分に研究して置いた。その予想が的中したのだった。 石川達三『青春の蹉跌』 232

c 世話する人があつて、愛川の家と縁談がととのつたのだが、その話がきまつて、半つきばかりすると、愛川は親類をあい手どつて訴訟を起こした。後見をしていたおじの不正がわかつたので、急にそういう手段を取つたのだった。 山本有三『路傍の石』 174

d このノートを讀んだとき、ぼくはあのパパが実在の人物で未紀の父であり、いまこの家のなかに実在する父のほうこそ未紀のつくつた架空の人物のようにおもえたのだった。 倉橋由美子『聖少女』 142

e 流動する砂の姿を心に描きながら、彼はときおり、自分自身が流動しはじめているような錯覚にとらわれさえするのだった。 安部公房『砂の女』 27

次に会話文に用いられるノダッタ断定文について見てい

くが、会話文のノダッタ断定文の用法は、(後悔)および(想起)におよそ限定される。

まず、(後悔)の場合は、およそゆノダッタと、ノダッタの前はゆとなるが(「こんなことなら教えてやっただった」と、許容度は下がるが、タノダッタが不可能なわけではない)、その命題は実現されなかつた過去の事実である。すなわち過去の事実は、(52) aでは「君の身体も見ておいてやらなかつた」、(52) bでは「お前は万国館へ出なかつた」、(52) cでは「おカンをわたしは見なかつた」、(52) dでは「院長を招待しなかつた」、(52) eでは「コインを持つてこなかつた」ということになる。

(52) a それからそれを黙って聞いていた私の方をじつと見て、「君もひどく顔色が悪いじゃないか。ついでに君の身体も診ておいてやるんだつたな」と私を気の毒がるように言つた。 堀辰雄『風立ちぬ』 181

b 「お前もいつそ万国館へ出るんだつたな、お前の面ならたしかに土人とまぢげえられたよ」

c 「はははは、おカンなら、わたしが見てやるんだつたな。——しかし、おまえが酒を買ってくるなんて珍しいな。」 山本有三『路傍の石』 949

d 「いや、俺も院長を招待することは考えた。ラーメン屋だつてかまわないさ。安がこれだけの店を持った

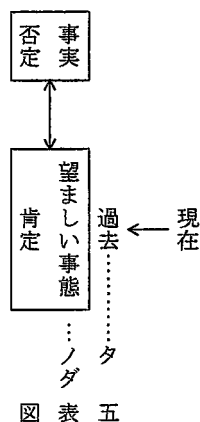
ことを見てもらえばいい。院長はいちばんよろこぶよ。
やはり招待するんだったな。」行動が言った。

立原正秋『冬の旅』 629
e 「月面にコカコーラの自動販売機があると知っていたら、コインを持つてくるんだったよ」

井上ひさし『ブンとブン』 137

このように、ノダッタの付いた命題と、そこに含意された過去の事実とは、肯否も逆なら、過去の事態であるにも拘わらずタが付かない。このことは次のように解釈できる。すなわち、過去の否定的な事実を受けて、その時に身を置いて(φ)、望ましいと思われる事態を提示し(ノダ)、それ全体が過去のことであることを示す(タ)のが、φ・ノダッ・タという形式であると考えられる。このようにして表わされる意味は、まさに(後悔)ということになる。ここでノダの働きは、望ましいと思われる事態を提示することであると考えたが、そのように判断したのは話し手である。すなわちノダは話し手の期待を表わしていると言える。

(図表五)。



次に、〈想起〉について検討してみたい。

(53) a 「そうだ君の家は漁業をやっているんだったね、それなら、きみが一日中泳ぐことができて不思議はない。ところできみ、もぐるほうはどうかね、潜水だよ、この方は一日中というわけにはいかないだろう」

新田次郎『孤高の人』 96

b そうだった、蒸発した男に行先を訊いてはいけなかった、と太郎は思った。男の方も通告されることを恐れて言わないのかも知れない。

曾野綾子『太郎物語』 907

c 「君のお父さんの名は、ロバート・ウィリアムズというんだったね」「うん……」

沢木耕太郎『一瞬の夏』 555

〈想起〉というと、ノダの働きの中では、〈発見〉〈再認識〉などに近いようにも思われるが、ノダッタの場合は、他者から聞いたことを、後から直接その相手に確認する(53) a・c、あるいは独りで思い返す(53) b) ことを表わしており、さんさんメガネを探した後に気付いて「なんだ、かけてた。」と言う場合に用いられる、〈発見・気付き〉のタの方から説明する方が妥当かもしれない。

おわりに

本稿では、文末ノダ文だけでなく、それ以外のノダの用法を統一的に説明しようとする試みのうち、主節に現われるものについて議論した。さらに稿を改めて、従属節に現われるノダについても検討を加えたい。

資料

芥川龍之介「好色」・安部公房『砂の女』・有島武郎「生まれ出づる悩み」・石川淳「処女懐胎」・石川達三『青春の蹉跌』・井上ひさし『ブンとフン』・井伏鱒二『黒い雨』・大江健三郎「他人の足」・開高健「裸の王様」・「バニック」・梶井基次郎「檸檬」・川端康成『雪国』・北杜夫『榆家の人々』・倉橋由美子『聖少女』・小林秀雄「モオツアルト」・「光悦と宗達」・沢木耕太郎『一瞬の夏』・椎名誠『新橋島森口青春篇』・志賀直哉「小僧の神様」・島崎藤村『破戒』・曾野綾子『太郎物語』・竹山道夫『ビルマの竖琴』・太宰治『人間失格』・立原正秋「冬の旅」・谷崎潤一郎『痴人の愛』・筒井康隆『エディプスの恋人』・夏目漱石『こころ』・新田次郎『孤高の人』・林芙美子『放浪記』・堀辰雄「風立ちぬ」・美しい村」・三浦綾子『塩狩峠』・三木清『人生論ノート』・三島由紀夫『金閣寺』・村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』・山本有三『路傍の石』以上CD・ROM版『新潮文庫の一〇〇冊』（用例に付された数字はCD・ROM版のページ）

参考文献

- Naomi Hanaka McGloin (一九八〇) 'Some Observations Concerning NO DESU Expression' "The Journal of the Association of Teachers of Japanese" vol.15 no.2
- 久野 暉 (一九八三・四)『新日本文法研究』大修館書店
- 大曾恵美子 (一九八六・一〇)「誤用分析2 『先生アイスクリームが食べたんですか。』」『日本語学』第五巻第十号
- 井島 正博 (一九八八・三)「物語と時制―期現代小説を材料として―」『東洋大学日本語研究』第二輯
- 田野村忠温 (一九八八・三)「否定疑問文小考」『国語学』第百五十二集
- 吉田 茂晃 (一九八八・三a)「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』第十五号 (神戸大学)
- 吉田 茂晃 (一九八八・三b)「ノダ形式の連文的側面」『国文学研究ノート』第二十一号 (神戸大学)
- 古座 暁子 (一九八九・六)「く、くのか―会話文における場合―」『教育国語』第九十七号
- 益岡 隆志 (一九八九・八)「モダリティの構造と疑問・否定のスコープ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版 (益岡 (一九九一・五) 所収)
- 森山 卓郎 (一九八九・八)「コミュニケーションにおける聞き手情報」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版

田野村忠温(一九九〇・一)『現代日本語の文法——「のだ」の意味と用法——』和泉書院

小金丸(野田)春美(一九九一・三)『『のだ』ではなく』の機能』『阪大

日本語研究』第三号

益岡 隆志(一九九一・五)『モダリティの文法』くろしお出版

野田 春美(一九九二・九)「単純命題否定と推論命題否定——『のだ』はない」と『わけではない』——『梅花短期大学紀要』第五号

吉田 茂晃(一九九四・二)「疑問文の諸類型とその文末形式——ノデ

スカ/マスカ型疑問文の用法をめぐって——』『島大国文』

第二十二号

井島 正博(一九九四・三)「推量文の多層的分析」『成蹊大学文学

部紀要』第二十九号

井島 正博(一九九五・三)「疑問文の多層的分析」『成蹊大学文学

部紀要』第三十号

牧原 功(一九九五・六)「疑問表現における『のだ』の機能の側

面——前提との関わりを中心に——』『日本語と日本文学』第

二十一号(筑波大学)

大場理恵子(一九九五・七)『『のだ』『のか』の習得上の困難点につ

いて』『言語文化と日本語教育』第九号(お茶の水大学)

岡部 嘉幸(一九九五・一〇)『『のですか』質問文の表現性——体言

化の機能という観点からの分類の試み——』『築島裕博士古

稀記念 国語学論集』汲古書院

野田 春美(一九九七・一〇)『『のだ』の機能』くろしお出版

井島 正博(一九九八・二)「形式名詞述語文の多層的分析」『成蹊

大学一般研究報告』第三十卷

鶴橋 俊宏(一九九八・三)「為永春水の人情本に於けるダロウ・ノ

ダロウ」『日本文化研究』第十号(静岡県立短期大学部)

戴 宝玉(二〇〇〇・六)「ノダとその否定をめぐって」『日本語

教育論集 世界の日本語教育』第十号

三枝 令子(二〇〇二・一二)「書き言葉における『だ』だろうか』『の

だろうか』『言語文化』第三十九号(一橋大学)

井島 正博(二〇〇六・一〇)「否定疑問文の語用論的分析」益岡

隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法研究の新地平

2 文論編』くろしお出版

趙 萍(二〇〇八・三)『『のだ』『のか』の習得に日本語能力お

よび学習環境が与える影響——中国語学習者を対象に——

『日本語教育研究』第五十三号

井島 正博(二〇一〇・三a)「ノダ文の機能と構造」『日本語学論

集』第六号(東京大学)

井島 正博(二〇一〇・三b)「上代・中古語推量助動詞の疑問用法」

『東京女子大学 日本文学』第百六号

井島 正博(二〇一〇・一二)「文末ノダ文の機能と構造」第八回対

照言語行動学研究会講演(於・東京工業大学)

(いじま まさひろ 人文社会系研究科 准教授)